

継続教育を見通した短大教職課程の教育

藏原 三雪・加納 弘二

On the program of the teachers training course in junior college

— The case study of Musashigaoka College —

Miyuki KURAHARA and Koji KANO

Abstract

Our college has teachers training course of physical and health education. Our many students want to get teacher's license when they get into the college. They study hard special subjects on pedagogy, educational psychology, teaching methods, and gymnastics, swimming, dancing, basketball etc.

And they have to have special lectures by the headmasters of junior high schools.

When they become the second-year students, they have teaching practice at junior high schools as student teachers for 2 or 3 weeks. They say they have had hard, fruitful and exciting days. And they hope to be teachers or sports instructors. Some of them want to go to university to study furthermore.

Teachers training program in junior college has contributed when they think and choose their vocation.

Key Words: junior college, teachers training course, teaching practice

キーワード: 短期大学, 教職課程, 教育実習

1. はじめに

年々、教職の道は厳しく高学歴社会のもとで短期大学における教員養成に対して否定的な意見もある。それは、以前の人口増加割合に対して、少子化の現代において短期大学で教員の資格を出す意義は既に終了したのではないかという考えである。さらに、今日の教育現場では「いじめ・不登校」などのさまざまな問題が表出している。この

ような中で、平成9年7月には教育職員養成審議会（教養審）が「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」答申を出し、平成10年7月からは文部省より「教育職員免許法の一部を改正する法律等」がだされ、現在の教員養成課程を有している大学・短期大学がその内容に関して見直し、修正を余儀なくされている。その骨子とみなされるものが教養審の答申にあるように思われる。これに対してはそれぞれの立場から様々な意見が

交わされたが答申における教員に求められる具体的資質能力の例は次のようなものであった。

- 「地球的視野に立って行動するための資質能力」として、「地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質能力」を持つこと。
- 「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」として、「課題解決能力等に関わるもの、人間関係に関わるもの、社会の変化に適応するための知識及び技能」が必要であること。
- 「教員の職務から必然的に求められる資質能力」として、「幼児・児童・生徒や教育のあり方に関する適切な理解、教職に対する愛着、誇り、一体感、教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度」が求められている。

また、同答申では「教員の資質能力の形成に係わる役割分担のイメージ」を提示している。そのなかの「養成段階」では「専攻する学問分野に係わる教科内容の履修とともに、教員免許制度上履修が必要とされている授業科目の単位修得等を通じて、教科指導、生徒指導等に関する『最小限必要な資質能力』（採用当初から学級や教科を担任しつつ教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力）を身に付けさせる過程。」となっている。これを文字通り読むと、短期大学の教員養成課程を修了し、採用されたならすぐさま一人前の教員として仕事ができるような知識・技術を身に付けていなければならないことになる。

さらに、この答申を受けて改訂された教育職員免許法においては、国際化への対応（外国語コミュニケーション・総合演習）、情報化への対応（情報機器の操作）、教職科目の重視（単位数増加）、教員の資質能力の向上（総合演習）等が盛り込まれている。

このような教員養成に対する文部省の方針、社会の動きに対応して教育内容を十分考慮し作成する必要がある一方で、現実に教員免許を取得した学生が、教員免許に対してどのように考え、取得後の進路はいかなるものかを把握し、今後の教育・指導に役立てる必要がある。教員免許を取得しても教員になる者が少ない現在、教員免許の意義

が多様化しているように思われる。

本研究では武蔵丘短期大学（以下、本学）における8年間の教員養成に関わる教育の試みを報告し、短大における教員養成を継続教育の一環としての役割について考察したい。

2. 教員免許取得のニーズと養成課程

1) アンケート調査から

本学では教職課程修了者で平成4年度から平成6年度の卒業時に教員免許の交付を受けた者127名に対してアンケート（現成蹊大学木内剛氏作成）調査を行った。

集計結果によると、入学当初は7～8割の学生が教員免許取得を希望している。本学を志望した理由に9割のものが何らかの形で「中学校教員免許が取得できる」ことをあげている。調査結果の概要は以下のようである。

卒業生で教員免許取得者127名に、卒業式当日あるいは2年次最終授業日にアンケートを行ったが回収できたものは119名分であった。（回収率93.37%）

選択肢では、もっとも自分の気持ちに近いもの一つだけ○印をつけてもらった。各質問に対する回答は次のようになっている。

Q1. 2年前、武蔵丘短期大学を志望した理由の中で、中学校教員免許が取れることはどれほどの重要性がありましたか。（N=119）

- ア. 決定的に重要な理由であった。 44人（37.0%）
- イ. 他にも志望理由はあったが、無視できない理由であった。 24人（20.2%）
- ウ. 他の志望理由があったが、できれば免許を取りたかった。 40人（33.6%）
- エ. 志望のときには、教員免許はどうでもよい方だった。 11人（9.2%）

Q2. 1年次の教職関係の単位の取得は、どれほど大変でしたか。（N=118, 1人無記）

- ア. やめたいと思ったことがあるほどつらいものだった。 16人（13.6%）

- イ. 大変ではあったが、やめたいと思うほどではなかった。 65人 (55.1%)
 ウ. すこしは大変であった。 31人 (26.3%)
 エ. それほど大変だとは思わなかった。 6人 (5.1%)

Q 3. 教育実習に行く前、中学校の先生になる意志はどの位ありましたか。(N=119)

- ア. 是非とも先生になりたかった。 25人 (21.0%)
 イ. かなりの程度、先生になりたかった。 17人 (14.3%)
 ウ. なれるものなら、先生になってもいいなと思っていた。 50人 (42.0%)
 エ. 先生になるつもりはなかった。 27人 (22.7%)

Q 4. 教育実習を終了して、先生になる気持ちはどう変化しましたか。(N=119)

- ア. 大変強く先生になりたくなかった。 39人 (32.8%)
 イ. かなり、先生になる気持ちが強まった。 22人 (18.5%)
 ウ. 少し先生になる気持ちが強まった。 32人 (26.9%)
 エ. 先生にはなりたくないと思った。 26人 (21.9%)
 → a. できてもやりたくない仕事だ 3人
 b. 自分には向いていない仕事だ 17人
 c. その他 6人

Q 5. 教育実習に行き、どんな点が一番良かったですか。(抜粋)

- 教師としての自覚に関すること
 「先生になりたいという意志が強くなった。」
 「教師という職業が本当にどのようなものかよく分かった。」
 「教諭という職業の大変さがよく判った。」
 「教育の現場とはどんなものか知ることができて大変良かった。」

「中学生に接して教員にとっても興味を持ったこと。」

「生徒たちと一緒に学べたこと」

「生徒指導について学べたことや、様々な子どもたちと出会えたこと」

「責任というものを強く考えるようになった。」

「2週間の間だけでも先生と呼ばれ、生徒と一緒に勉強できたことがよかった。」

- 生徒や他の教員との交流に関すること

「生徒たちと信頼関係がもてたこと」

「生徒とたくさん話せて、クラスの子とは仲良くなった。」

「多くの子どもとふれあえた」

「実習終了後も生徒たちが手紙を送ってくれたりと交流ができていくこと」

「生徒たちとの交流が一番良かった」

「子どもたちと一緒に勉強できたこと」

「若い先生、しかも体育の先生ということで生徒が大変喜んで接してくれたこと」

「生徒が最後の1週間でいろいろな話をしてくれたこと」

「諸先生、生徒と仲良くできたこと」

- 授業に関すること

「生徒と一緒に楽しく授業が行えたこと」

「指導する楽しみ」

「指導がうまくいったときうれしかった。授業計画がうまくできたとき」

「自分が教えたことで生徒の成長が実感できたこと」

「実際に教えることの大変さを知ることができたこと。」

「いろんな人と出会えて教えることの難しさを知ることができた」

- その他全般的なこと

「知らない世界を体験できた」

「人をまとめる力がついた。」

「最後に生徒が帰らないでとってくれたこと」

「いろいろなことをいろいろな角度から学べたこと。」

「HRなどで自分の経験したことを話すことができた。」

「いじめ等の問題がどのような中から生じてしまうのかを考えることができた」

「今まで見えない面が見れたこと（先生も、生徒も）」

「感動することが多かった。」

Q 6. 教育実習に行き、今でも忘れられない一番困難なことは何でしたか。(抜粋)

• 授業や指導案に関すること

「指導案作り」

「指導案がなかなかうまく書けなかった。時間の使い方（授業）が難しい」

「道徳の授業を自分で指導したこと」

「指導案の作成が大変だった。」

「学習指導案がつくる暇もないほど忙しい」

「研究授業の準備」

「学習指導案が期日までに仕上がらなかった。」

「生徒にどのように授業内容を説明し理解してもらうか」

「伝えたい内容がうまく伝えられないこと。」

「指導案がなかなか思うように行かず先生に随分と指導を受けて泣いてしまった」

「研究授業の指導案をワープロで作成し、先生方の分までコピーしたこと。」

「寝る暇のないほど指導案を書いたこと、自分の思い通りにならない授業」

「指導案がうまくできなくて何回も書き直したこと」

「学習指導案を書くことが大変難しく思っていた以上に書くことが多かった。」

「教える科目や自分がつく先生が多かったので、指導案を書くのが大変だった」

「授業をまかされたとき緊張がほぐれずに生徒に助けられた。」

「授業内容を考えること」

「できない技をやって見せてといわれたこと。道徳の授業の進め方。」

「生徒の前で手本を見せることができなかったこと」

• 生徒や他の教員との交流に関すること

「生徒とぶつかりあってしまったこと（部活動において）」

「問題の持つ生徒の対応の仕方」

「体育科の先生方との時間の過ごし方」

「怒ることが難しい」

「部活動を見ていてなかなかまとまらなかったこと。」

「野外実習での生徒のみはり等」

「指導教員ともめたこと」

「いじめのこと」

「生徒たちが自分の授業になじんでもらうまでが大変だった。」

「子どもになれるまでの1週間がつかった。先生の仕事は思ったより忙しい」

「担当の先生とうまくやっていくこと。」

• 学級指導に係わること

「担当の先生が出張中クラスをまかされたこと。」

「生徒ととけ込むのに苦労した。」

「掃除の時間にしてくれなかったこと」

「最初のころ生徒に話しかけてもほとんど反応がなかった。道徳の時間。」

「HRでの先生の話でどんなことを毎日話してあげればよいのか考えるのが大変」

Q 7. 教育実習に出る前に短大で是非教えておいてもらいたかった事柄がありましたら、記述して下さい。(抜粋)

• 指導案について

「指導案についてもう少し詳しく勉強しておくべきだった。」

「指導案の書き方をもっと詳しく」

「学習指導案の中にある指導の立場（教材観、生徒観、指導観）の書き方を教えて欲しかった。」

「研究授業時の指導案の書き方。」

「指導案をもう少し練習したかった。」

「指導案の書き方、実習前に読んでおくべき本（推薦図書など）」

「指導案（略案、細案ともに）の書き方」

「もう少し指導案の作成の仕方を詳しく教え

てもらいたかった」

• 授業について

「道徳時間における指導の仕方」

「生徒の前で話すような場の練習をもっと多くやってほしい。」

「道徳の授業方法を教えてもらいたかった。」

「実技の指導法（細かい点，補助法など）」

「保健の授業についてもっと詳しく勉強した方がよいと思う」

「実技だけでなく保健や道徳の授業の進め方を行ってほしい。」

「指導案の書き方が全然違っていたので大変でした」

「実技の授業の中でもっと人の前にたつ機会を増やしてほしい。」

• 教育実習全般に関すること

「教育実習の実践的な内容」

「今の中学校の実態」

「もっと人前にたつ機会を増やしてほしい」

Q 8. 教員採用試験は受けましたか。受けた人は，受けた都道府県名を記して下さい。

ア. 受けた。 → 67人（56.3%）
 埼玉21，長野6，新潟7，福島3，神奈川4，東京11，栃木2，茨城，広島，静岡，群馬，山形，千葉

イ. 受けなかった。 52人（43.7%）

— S Q 1. 教員採用試験でもっとも難しかったのは，どんな事柄でしたか。（重複回答）

a. 一般教養 21人（31.3%）

b. 教育の理論や方法 11人（16.4%）

c. 教育法規 23人（34.3%）

d. 体育の専門知識 16人（23.9%）

e. 体育の実技 10人（14.9%）

— S Q 2. 一次試験は合格しましたか。

- a. 合格した。
 b. 合格しなかった。

67人（100.0%）

Q 9. 今，先生になる気はどうですか。

ア. 今年も採用試験を受けて先生に再チャレンジするつもり。 17人（14.3%）

イ. チャンスがあれば，先生になりたい。 49人（41.2%）

ウ. やっていいが，諦めた。 33人（27.7%）

エ. 先生にはなりたくない。 20人（16.8%）

Q10. 教員免許の取得は就職にプラスでしたか。

ア. プラスだった。 43人（36.1%）

イ. 関係なかった。 38人（31.9%）

ウ. わからない。 37人（31.1%）

エ. マイナスだった。 1人（0.8%）

Q11. 卒業式に教員免許をもらえましたが，今一番思うことは何ですか。（抜粋）

• 教員免許を取得できたこと

「良かった」

「自分自身よくやったと思う」

「うれしいです。」

「いろいろあったけどとてもうれしい」

「頑張ってよかったと思う」

「人生の中で本当によい経験になった」

「一所懸命勉強してよかったと思う」

「免許の一つだなあ，使用するときはないだろうと思う。」

「よかった，ムサタンにきたかいたがあった。」

「最後までやり遂げたという充実感」

「やればできるんだなと思った」

「二年間頑張って良かった。うれしい」

「頑張って勉強した甲斐がありました。」

「本当に教育実習は今まで生きていて1番良い経験だった。」

「教育実習とはいえ生徒から先生と呼ばれたことがうれしかった。」

「生徒と先生の気持ちが両方分かったからよかったと思う」

「教育実習はとても大変でしたがもう1度やってみたいです。」

「短大入学時の夢が1つかなえられてとてもうれしい。」

「これからの生活であまり経験することができないことをさせてもらいました。」

「大変だったけど頑張って免許を取ってよかった。」

「苦勞して取得したので実際の免許状をもらってほっとしている。」

「教育実習の大変だった日々も無駄にならなくてよかった。」

・教員や他の進路について

「教員になる」

「絶対教員になりたい」

「この免許を使うときがくればよいと思う」

「これからの生活になんらかの形で役立てていければよいと思う。」

「できれば今年も採用試験を受けたい。」

「なにかの時に役立てたい。」

「編入先で今度は高校の一種が取得できるように努力したい。」

「いつか絶対教員になれるようがんばりたいと思います」

「うれしいし、これから仕事の面でも役立てていきたい。」

「この免許がどこかで使えればよいと思う。なんらかの形で先生になりたいと思う」

「絶対教員になりたい」

このアンケートは履修学生の生の意見として、その後の授業ならびに教育実習事前指導を行うにあたって非常に参考になり、学生のニーズに応じた本学の工夫を行うために意義があった。

2) カリキュラムの編成と本学の工夫

・単位数

本学は短期大学であるが健康・栄養専攻における栄養士必修単位数との関連で、卒業要件単位数は72単位と他の短期大学から比べると比較的多い単位数となっている。さらに、本学で中学校教員

2種（保健体育）の免許を取得するためには卒業要件単位に加えて9科目15単位の教職に関する科目を修得することが必要である。すなわち、卒業時に教員免許取得者は87単位修得することが必要になる。

・教育実習履修要件

本学で2年次に教育実習を履修しようとするものは1年次に開設されている教職に関する科目ならびに教科に関する科目の全ての単位を修得していることが必要である。これは、教育実習は教育現場にでて、生徒に実際に接し授業、指導を行わなければならないのであるが、短期大学においては1年数カ月の準備・勉強期間しかないため、少なくとも1学年時の単位は必要であるという考えから実施されている。本学で1年次に開設されている教職科目は10単位である。

・実践的アプローチ

本学の教職課程履修者は1年次から教育実習終了後にかけて参加ならびに実施しなければならない行事や課題がある。

a. 講演会（現職教員・教育委員会）

1年次 後期

「教職をめざす人たちへ」

「卒業生（正規採用、非常勤、臨採等で教育現場にいる）と語る」

2年次 前期

「教育実習に向けて」

「教員採用試験の心構え」

この講演会は、上記のように全部で4回開催される。1年次の「教職をめざす人たちへ」というテーマでは、吉見中学の学校長、東松山市内あるいは近郊の中学の学校長、吉見町教育長、東松山市教育長という教育現場に直接携わっている方から毎年1名をお願いして行っている。内容は現在の中学生の実態を始め、教職をめざすための心構え、勉強の仕方等を含んで行われる。毎回、講演会終了後に参加学生に意見、感想、質問を書いてもらい、その内容を講演者にもコピーして差し上げている。参加学生は、大学教員の授業と違い教育現場に接している先生方の生の声を聞き、思い

を新たにする感想を書く者が多い。この講演会は平成5年度から実施している。

1年次の後期には、卒業生で教職に就いている者が先輩の意見・考えを、これから教職に就こうとする者に話をし、後輩から質問を受けたりする交流の場が設けられている。この会は本学を卒業した先生を招くため、平成6年度から実施している。内容は教員採用試験の勉強の仕方、現在教師をしていて楽しいこと、悩んでいること、学生時代に必要な準備等である。この会も参加学生に意見・感想・質問を提出してもらい、参加した卒業生にコピーを渡している。参加学生は先輩の熱意ある話を聞き感動し、教員への志向を高める学生が多い。卒業生も後輩の意見・感想を読み自分自身の志気を高めるのに役立っているようである。さらに平成10年度にこの会を開催した際には、近隣で非常勤講師をしている卒業生が参加し、自分が勤めている中学校での問題点、生徒指導等で悩んでいることなどの相談をしていった。このことは在籍中の学生だけでなく、実際の教育の現場にいるものにも役立っている会であるといえるであろう。

2学年になり、ほとんどの学生が6月から教育実習が始まるので、5月に直前の講演会を開催している。これも前述の中学校の校長先生や教育委員会の方をお願いして開催しているわけであるが、実習の心構え、特に注意しなければならないところ、中学校や生徒の状況など講演していただいている。この講演会は平成5年から実施している。

教育実習が終了するとすぐに、教員採用試験が行われるので、試験の2週間前をめどに採用試験のための直前の講演会が開催される。本学では教育実習履修者全員に採用試験受験を指導している。これは、学生自身の教員になる意識の向上を目指していることと、先のアンケートに「チャンスがあれば教員になりたい」が、そのための手段や対策の仕方を知らない学生がいるためである。また、教育実習実施中学校を訪問して、校長先生や実習担当の教員と話をしても採用試験を受験しない実習生に対する厳しい批判があるからである。教員免許を取るだけが目的で実際に教員にな

る気のない実習生を教育現場で指導しなければならない中学校の先生方の負担はかなり大きいものであることが予想される。

b. 事前指導

教育実習は事前指導を含めて現在3単位になっている。この事前指導では本学で作成した「教育実習の手引き」を使い、教育実習に臨むにあたっての心構え、中学校における教員の仕事、役割等、体育実技・保健・道徳の授業の指導案の作成の仕方、人前での話し方（挨拶、実技の運動の説明の仕方等）、先生や生徒との接し方、教材研究の仕方を取り上げて説明している。補助教材としては「体育必携」（埼玉県版）やこれまでの実習生の授業風景を撮影したビデオなどを使ってより具体的にわかりやすいように努めている。

また、実習期間に記載する「教育実習の記録」には事前指導で「教育実習にあたって（課題・目的）」を書かせている。これは学生の目的意識を明確にさせるのに役立っていると同時に、実習担当の先生にも実習生がどんな目的をもって実習に臨んでいるか理解してもらえるものである。

c. 見学（参観）実習

教育実習に先立ち近隣の中学校に協力を依頼し体育の授業を見せていただいている。学生が現実の中学校において体育の授業を見ることにより、教員の授業の進め方、生徒の反応、中学生の実態等を前もって知っておくことは、本人が実習する際に非常に参考になると考えられる。この授業参観実習は平成9年度から実施している。東松山市内の中学校や吉見町の中学校で体育の授業を見せていただいているが、実習学生の本学における授業の空き時間と協力中学校の体育の時間割等の関係で学生ひとりが1時間の授業を見せていただくのが現実では精いっぱいのところである。できれば学年の異なる授業を参観できると発育期にある中学生の様子がよくわかるであろう。その際、学生には実習の記録にある「参観の記録」を書かせるようにして、授業の参観の仕方、体育授業の見方、生徒と先生の接し方を特に注意して観察するように指導している。この時期は年間計画との関

係からスポーツテストを実施しているところがほとんどではあったが、実習参加学生にとっては教育の現場を先生の卵として見学できることの意義は大きいようである。

d. 実習中の指導

本学では教育実習中に必ず教員が実習中学校を訪問し、学校長あるいは教育実習担当教員に実習受け入れのお礼と学生の実習状況を伺うことにしている。訪問担当は教育実習委員会（後述）の教員たちと、実習生が多い場合は本学の健康・体育専攻の先生方をお願いしている。実習中学校は全国各地に散在し非常に忙しいことではあるが、教育実習を指導してもらう中学の先生方から、実習生の状況や現在の中学校の状態等を伺うことは今後の学生指導充実に非常に意義のあることである。

教育実習事前指導の時間に、実習中学校での打ち合わせの内容（学校の教育方針、規模、担当学年、担当授業とその時間割等）を訪問担当教員に連絡するように指示している。

e. 通常の授業（体育実技）

特に、2学年前期の教育実習参加者に対して各実技担当教員が多様な形態で模擬授業を行ったり、指導案の略案を書かせたりしている。

f. 教員採用試験

前述のように本学では教育実習履修者全員に教員採用試験を受験させている。これは前に述べた理由の他に受験勉強自体が学生の知識・教養を高めるとともに就職試験等にも役立つことがあげられる。

本学では受験する前に模擬試験と講演会を実施している。模擬試験は教育実習が始まる前の5月中旬に行い、講演会は前述のように教育実習終了直後の7月初旬に行っている。教員採用試験受験地は本人の出身県、埼玉県あるいは期日の都合がつけば他の県でもかまわないが、埼玉県を受験する場合は本学で募集要項をまとめて取り寄せて学生に配布している。これは平成7年度から実施している。

g. 教育実習懇話会（反省会）

直接の学生指導とは少し離れるが、この会は教育実習でお世話になった中学校の校長及び指導教員ならびに吉見町教育委員会、東松山市教育委員会の方々を本学におまねきしての懇話会で教育実習全体に対するご意見や感想を伺っている。これも事前指導や事後指導時において学生に準備させることや今後の指導に非常に役に立つ会合である。

3) 科目等履修生制度について

本来は社会人の再教育として利用される制度であるが、本学では卒業後に教員免許を取得したい人や2年次に教職課程を履修し卒業後に教育実習を行う学生を受け入れている。また、本学の教育実習履修要件である1年次の教職及び教科の授業の再履修者は2年次に単位を取得し、卒業後科目等履修生として教育実習を履修している。

4) 教育実習委員会

本学では教職科目担当教員（平成10年度現在6名）で平成3年開学時から教育実習に関するあらゆる事項について協議・対応してきている。上述の各項目もこの委員会が主体的に動き関係事務職と協議し、協力を得て進めてきている。現在の教職課程履修希望者や教育現場の問題等に迅速に対応するため今後とも重要な役割を担うことであろう。

3. 教育実習—実際に教えるという体験—

すでに見てきたような教職に関わる科目の履修を経ていよいよ教育実習に行くことになる。ほぼ5月の下旬から6月にかけて2週間から3週間の予定で母校（中には吉見中学校や東松山市の中学校にお世話になる場合もある）に実習に行く。事前指導で指導案の書き方の指導を受けたり、実際に教壇に上がって、自己紹介の練習や学活での担任としての話の練習などみんなの前でパフォーマンスの練習を積んでくるが、直前になると「どきどき」したり、「何をしてもいか分からなくなった」「眠れない」などと不安感を増してくる様子が授業の中でも現れてくる。捻挫など思わぬけがをするのも直前に見受けられることの一つであ

る。

こうして教育実習が始まって一人が元気で終わって帰ってくると次に始まる実習生たちはその経験を聞いて、心配ではなく心待ちにするようになる。その意味では4月から5月の事前指導はそれまでの教職課程の授業を実習によって実を結ぶことが出来るようにするために重要な意味を持っているといえる。

教育実習前と後ではどのように彼らの考えが変化したのであろうか。実習記録簿に「実習にあたって(課題・目的)」(A)と「実習全体の感想と反省」(B)を書くページがある。前者は行く前に、後者は終了後に書くことになっている。このわずかなページにも彼らの考えの変化を知ることが出来る。

「わたしは中学生の時から、保健体育教師になりたいと強く思っていました。もちろん他の職業に一時的に憧れることはありましたが、それでもわたしの最後に行き着くところは教員でした。そのため教育実習をさせていただけると言うことは、夢に少し近づく貴重な体験だと思っています。」(A)

「先生方はもちろんの事、生徒達に助けられた実習でした。教科指導では研究授業で、大変積極的に授業に参加し。協力してくれました。学級指導ではわたしの知らない事を教えてくれたり、アドバイスしてくれました。また道徳の授業をさせていただいたときには、普段とは違う真剣な眼差しを見せてくれました。部活動では1日目の練習に不安ながら参加させてもらったのですが、練習の最後に「先生、明日もきて下さいね」といって来て、とてもうれしくて、毎日参加したいと強く思いました」(B)'98, K.M.さん(以下、ことわりがないものはA, Bは同一人物のノート)

「この頃(中学)わたしは体育の教員になりたいと思うようになりました。わたしは中学校の頃の夢を叶えるために短大に入学し、専門的な教科を学んでいます。そしてその夢に教育実習という形で一步近づく事が出来ました。まだ専門教科を半分しか学んでいず、人生の半分も生きていないわたしに2週間という貴重な時間を与えて下さ

て本当に感激で言葉も出ません。だから、この貴重な機会に生徒のみなさん、先生方そして中学校全体から多くの事を学びたいです。……授業、部活動や学活などの様々な面からふれあいながら、中学生の気持ちに少しでも近づけるようになりたいです。」(A)

「教育実習を終えてスポーツがこんなにも人と人との間を縮めてくれるものだと改めて感じた。……わたしは今回たまたまマット運動という一番苦手な種目が、当たってしまい正直言ってものがすごく不安だった。だから不安に勝つため、一生懸命練習した。でもどうしても倒立前転だけは出来なかった。そしてできないまま教育実習にはいってしまい不安はました。しかし実際生徒と授業を行ってみると、その不安はなくなり、わたしも生徒と一緒に勉強して出来るようになればいい、生徒にいいアドバイスが出来るように自分の身体で体験したこと、失敗したこと、成功したこと、全部を生徒に見せて身体でぶつかっていきこう、という気持ちになった。そうすることによって、生徒と一緒に目標が持て、その目標のためにがんばれた。」(B)'98, S.M.さん

「教師という職業は生徒を相手にした仕事で、生徒が40人いたら40通りの考えや表現の仕方があります。もちろん自分も自分なりに意見を持っているのでお互いに意見をぶつけ合う事により、生徒から色々な面で学ぶことがあるでしょう。そのことの繰り返しは教師を成長させる過程だと思う。このことが自分を大きくさせる事につながっていくので、このことから教師という職業につきたいと思う。教育実習に向けて課題はというと現在の中学生の考え方を知る事です。……そして自分なりに自分の教師像をみつけないとも思う。」(A)

「教育実習が始まる前は頑張るぞとか、やってやるぞという期待とどんな生徒や教師がいるのかなあとか、大丈夫かなあと言う不安が自分の心の中を充たしていました。いざ教育実習が始まるとその不安の気持ちはどこへやらいってしまい、期待の気持ちが自分の心の中で大きいということを感じることが出来ました。教育実習期間中は毎日毎日朝早くから夜は23時ぐらい遅くまで学校にい

たけれど、1日1日がとても早く過ぎていき、1日1日の大切さを知ることも出来ました。……自分自身教師らしいことはあまり出来なかったけど、生徒達はそんな自分にたいしてよくついてきてくれたと感謝の気持ちでいっぱいです。授業中には生徒から教えられる点や生徒に助けられた場面も数多くありました。……教育実習を終えた今、2週間前の自分とは違う自分が現在いるような気がします」(B)'98, T.U. 君

「小さい頃からの夢だった「先生」への第一歩目となる教育実習を目の前に控えた今、学習面、生活面、両方においていくつかの目標を立ててみました。まず学習面においては「分かりやすい授業」をすることです。……常に教員からの一方的な授業をするのではなく、生徒達の発言の場を増やす授業を心がけたいとおもいます。……もう一つの目標は今の中学生の心や気持ちを少しでも理解したいという事です。いじめや不登校の問題がありますが実際の現場に触れられる2週間の間に生徒をよく見ていきたいと思っています」(A)

「何もかもが不安だった実習前と今の気持ちは180度変わりました。はじめのうちは授業見学でもどの場所で見たらよいか、どのような声をかけたらよいか、学級でも何を話したらよいか全然わからなく、連絡も伝えるだけで精いっぱいという一方通行の日が何日か続き、わたしなりに悩みもしました。日が経つにつれ、話しかけてきてくれる生徒が増え、悩みが安心にかわってきました。……生徒の一言で励まされたことが何度もありました。この2週間での貴重な体験は全ての面でわたしを大きくしてくれたのではないかと思います。……でも今は前以上に「頑張ろう」という気持ちが強くなりました。どんなに遠回りをしてもどんなに時間がかかってもいつか必ず教員になりたいとおもっています。」(B)'98, T.K.さん

「わたしは教師を目指し、短大で勉強をするようになって、はじめて、先生から見た授業や学校を少しずつ感じるようになりました。1回の授業を行うためにはたくさんの資料や情報を集めます。そしてどんな風に展開すれば生徒達に分かりやす

く教えることが出来るかなどを考えて授業をするのです。生徒が勉強をする以上に先生は勉強をして下準備をしていることを知りました。……わたしは実際行われている教育の現場にたつことで机の上では学ぶことの出来ないことをこの教育実習で勉強したいと思っています。」(A)

「はじめて全校生徒の前にたったとき緊張と不安よりも自分がとても興奮していた。この2週間をどんなものにするか、どんな生徒たちがいるのか……と。しかし先生という仕事は思った以上に忙しくつらいものだった。時間に追われ、仕事に追われ、今までわたしが見てきた「先生」というものがまたちがった視点から見られた2週間だった。……何度もくじけそうになり、愚痴をたたいていた。こんなに教師とは大変なのか、自分の夢見ていた教師だが、だんだんと崩れて、自分は本当にこんなに大変な仕事、責任のある仕事をこれからやっていけるのか、自信もなくしていた。けれど日が経つにつれて、生徒がたくさん話しかけてきてくれて、昼休みはみんなで外へ出てバレーをしたりしていくうちにやっぱり教師って生徒達、子どもたちと直接ふれあっている仕事なのだったと思った。……教師って大変なことばかりだったけど人を育てる仕事だということ、他の仕事には決して味わえない喜びがあることを知った2週間だった」(B)'98, M.M.さん

これらの記録に記されているように、不安を持って始まった実習ではあるが、実習そのものの中でつまり生徒や先生方に学び、支えられながら、一つ一つその不安を克服し、成長してくること、また教わる側から教える側という立場の転換の中から感じることの変化に気づいていることにも注目したい。さらに「スポーツが大好き」で小学校から何らかのスポーツに関わってきた学生たちにとって「体育がきらい」「体育の時間が苦手」という生徒達との出逢いはいわば未知との出逢いでもある。なぜなら学生たちはスポーツを通じて友人にも恵まれ、自分たちが中学校や高校の時にはクラスの中に「体育が苦手」という友達の存在さえもよく認識していなかったからである。また生徒とのふれあいは授業に限らず、朝と帰りの学

活、給食、掃除、放課後の部活など多面にわたっている。中でも学級担任として生徒たちに接する事によって「何よりも2年2組は歌がしっかり歌えるというところにクラスの質の良さを感じる。他のクラスを見てもあれだけの声が出るクラスはない。歌をしっかりと歌えるクラスはきっとまとまりがあるからあそこまで歌えるのだろう。生活記録を一人一人見てコメントを書いたことも勉強になった」(A, '98, H.K.君)のようにの育つ感情も見落とすことができない。

4. 養成後—多様な進路選択—

今日のように「少子化」社会のもとでは新規の教員採用が小、中、高の学校の種別と教科目を問わず極めて少ないので、採用試験を受けても本採用に到るのは厳しい状況にある。しかしながら教育実習を通して生徒や現場の先生方からの励ましを受けると、是非「何年かかっても教員になりたい」と希望する卒業生も出てきた。1期生、2期生、3期生と卒業生を出す中で、臨時採用ではあるが教壇に立つ卒業生が巣立っていった。先輩を見た後輩たちも臨時採用という形で仕事をしながら、小学校の免許を取りたい、他の教科の免許も取って少しでも採用の機会を広げたいと積極的に考え、次のステップを踏みだした卒業生もいる。また実習時に休みがちな生徒の相談にのり、養護教諭を目指し、さらに看護学校に進んだ卒業生も2名いる。中には実習をして「自分には教員はあっていない」と判断し、教員採用試験の一次試験に合格をしたが、二次は受験せずに公務員試験を受験し、今では東京都の公務員として公立プールで働いている卒業生もいる。いずれにしても教職を履修した学生にとって、教育実習の経験は進路選択と深く結びついているということが出来る。

卒業後どのような職種に就いたかについて、まず整理しておこう。

1) 就職

教員	正規の採用	1名(4期生)
	臨時の採用	1期～7期 青森, 新潟, 埼玉, 茨城, 沖縄など16名
	補習学級教員	(西宮市)

幼稚園教諭

関連職種 スポーツインストラクター(スイミングなどのコーチ, 身体障害者スポーツ施設職員), 幼児体育指導員
 社会福祉施設職員(養護施設保母, 知的障害者施設指導員, 老人福祉施設など)
 保育園保母, 学童保育指導員
 短大, 専門学校等学校関連の職員
 公務員(公立プール, 消防士)
 公立体育館指導員
 青年海外協力隊

その他一般企業

2) 進学

教育実習に行つて「教員になりたい」と強く希望すると「1種免許を取つて採用されたい」「高校の免許もとりたい」「もっと力をつけたい」などの理由を持って進学を希望する学生も出てくる。中には実習校で不登校の生徒との関わりから養護教員を希望する学生もいる。従つて進学先はいくつかに分かれる。

体育系4年制大学

(中京女子大学, 中京大学, 国士舘大学, 東海大学, 大阪体育大学, 仙台大学, 天理大学など)

福祉系4年制大学

(文京女子大学)

看護専門学校

医療系専門学校

留学

すでにこうした大学の編入後、卒業して公立中学校の教員になったり、あるいはさらに勉学を継続し、大学院に進学し短大以来興味を持っていたバイオメカニク的な視点から「スキー場におけるスキーとスノーボードの衝突事故」に関する修士論文をまとめた卒業生も出てきた。ここで興味深い事は、はじめから4年制大学を志望しながら、短大に入学してきた学生が編入する事もあるが、推薦入学で入学し、教職を選択し、教育実習に行つてみたら、「勉強が面白くなった」「教育は

奥が深い」「実技の力ももっとしっかりつけて教員になりたい」などなどの理由から進学を希望するようになる学生の存在である。

3) 小学校免許の取得

臨時採用の教員になったり、またすぐに採用されないが教育委員会や実習で知り合った先輩の諸先生がたから「小学校の免許もとっておいた方がいい」とアドバイスを受けている卒業生もいる。一緒に勉強する仲間が出来る通信教育も継続する。現在以下の3種類のパターンがある。

通信教育で小学校免許を取得した人（継続中も含む）

通信教育+文部省資格検定試験で小学校免許を取得した人

通信教育で他教科の免許を取得した人（社会科）

5. 考 察

現状では短大を卒業してすぐに教員採用試験に受かることは難しい。しかしながらそういう状況下にあっても継続教育という将来的な発展を見通した上での短期大学における教職課程の教育の意味について考察したい。

前に見たように卒業時のアンケートに見られる感想の中に次のような記述がある。

「人生の中で本当によい経験になった。」

「本当に教育実習は今までいきていて一番よい経験になった。そして免許が取得出来てうれしい。」

「最後までやり遂げたという充実感。」

「短大入学時からの夢が一つかなえられてとてもうれしい。編入先で今度は高校の一種が取得できるようにしたい。」

実質的には1年間しか勉強をしない内に実習に行くことになる。教職課程を選択することは学生たちにとって、教職の専門科目のみならず保健体育の専門科目や実技の授業もおおいので、授業時間数をみると2年生前期まではほとんど空き時間がないほど負担は大きい。途中「あきらめようか」「もう大変だ」という気持ちがわいてきた頃、

現場の中学校の先生からの講演や現場に出ている先輩たちの話を聞きながら、「やっぱり続けようか」という気持ちの建て直しをはかりながら、実習をむかえるのである。その意味では通常の授業と同時に特別に組み込まれた講演や先輩からの話はひとつの重要な動機付けの機会となっている。また卒業生の話を身近に聞いて「自分も絶対に教壇に立ちたい」と思うようになったり、「次はわたしが後輩の前にたって話をしたい」と密かに心を決める学生もいる。遠くかけ離れた人の話ではなく、同じキャンパスで学んだ先輩の話がことのほか学生たちを励ましているのである。こうして2年次の実習直前には急激に成長する。

さてそれでは教育実習はなぜこれほど学生たちにとって大きな意味を持つのであろうか。それはまず第1に彼らが始めて「教わる立場から教える立場」に転換し、一人の社会人、大人として中学生に接するという体験の中で不十分ながらも「大人」となっていくことが大きいのではなかろうか。先に見たように「前の自分と全く違う自分がある」「20年間ではじめて最も緊張し、しかも充実した日々を過ごせた」という実感はこうした経験のなかから発せられるものである。これは毎日の授業の準備だけでなく学活や部活、職員会議の傍聴、給食や清掃の指導、けんかの仲裁など実に様々な教育現場に身を置いて、現実の生徒達が目の前にいるからこそ可能なことである。相手なしには決して学ぶことが出来ないことを学んでいるのである。日々成長する中学生たちと暖かく見守って下さる実習校の先生方の指導に支えられてのことである。

第2に実習生たちが曲がりなりにも短大で身につけたことあるいは小学校以来クラブ活動で自分が打ち込んできたものをはじめ中学生に教えるということによって試すことが出来る機会である。もちろんこれは好き勝手に力を出すのではなく、指導案を作り指導教官の指導のもとに発揮されるのであるが、試合以外にもてる力を出しきる経験は多くはないなかで貴重な経験となる。実習生にとって自分の得意種目に当たったとき、よい実習が出来るとは限らない。上記の記述にも見られたがマット運動やハードル、柔道など実習生にとっ

て比較的苦手な種目に出会った実習生はまず自分がその運動を出来るようにし、何とか生徒達の前でお手本を見せたい一心で練習する。この練習の中で悪戦苦闘していることそのものが中学生たちから応援を受けることになる。このように2週間の短い期間にも関わらず実習生自身の実技の力の向上が見られると、生徒達になにがしかを提供する事ができる。これは熟達していない教育実習生だからこそ許されることではあるが、こうした環境の中で生徒と実習生の心の通いあいも生まれ、それがまた次の授業をする支えとなっている。この点では保健体育の中でも生徒達の前で実技を行う体育の実技をどのようにこなすかは実習の上で大きなポイントとなる。

第3に保健の授業の事である。初期の頃保健の授業では教科書をそのまま読んで授業を終わらせた実習生もいて、反省させられた。そこで今ではいくつかの教材について保健の指導案も立ててから実習に行くことにしている。実習校のスケジュールなどによってばらつきはあるが、喫煙、救急法、エイズ、第二次性徴などのテーマはこれまで行われた保健の授業では比較的評判の良かったものである。この授業でも日本赤十字の救急法の講習を受けたこと、スポーツ医学、健康管理論、運動処方論などの授業で学んだことを、もう一度中学生の保健の教科書を見ながら指導案を立てる。すると今まで短大で勉強してきたことが生きるといことも新鮮な発見のようである。

第4に道徳の授業である。身体を動かすことは物怖じしなくても一時間生徒の前であまり動かずに授業をすることは苦手の意識が強い学生たちである。そのため上記の保健や道徳の授業は「しなくてすむものならしないで済ませたい」と考える学生もいるが、担任の仕事の中に道徳は重要な仕事の一つであることを考慮し、これについても準備をして実習に臨んでいる。「道徳も機会があったら是非させて下さい」とお願いをすると機会に恵まれる実習生も年々増えてきた。中には道徳の授業を見てからはじめて「この卒業生(中学校の先生にとっての)は本当に先生になりたいのだ。中学を卒業してからこの学生にはスポーツや先生になりたいというどんな出逢いがあったのか知り

たい」などと中学校の先生との新たな交流が道徳の授業を通して始まったこともある。道徳で取り上げる教材は友情(友達)、兄弟のこと、進路(わたしの夢)など実習生にとっても身近なテーマである。実習校の先生から「道徳の研究授業では自己の体験談もふまえて、なかなかの授業でした」('98, 6, 15, T.U.君), 「道徳の授業での生徒とのやりとりや普通の生徒との接し方を見ても相手の気持ちを考えて、言葉を選んでいるのがよくわかりました」('98, 6, 12, U.H.さん)

このように実技以外の授業を終えることが出来るのは実習生にとってまた一つ大きなハードルを越えたことを意味する。

第5に授業以外の様々な場面での生徒達との交流の重要性である。昼休みや放課後の短い時間を使って、短大で楽しくやってきたことだから中学生にも是非味わってもらいたいとサッカー、エアロビクスダンス、カバディ、ハンドボール、バレーボールなどもっとも自分の得意とする種目を楽しく生徒に教える機会に恵まれた実習生もいる。

たとえばエアロビクスダンスは日頃そういう運動にはなじみのない男子バスケット部の生徒に教えたなら家に帰ってから「今日は実習生の先生からエアロビクスダンスをならって面白かった」と親に話があったと言われたり、養護の先生たちも知らないから「是非あなたがいるうちに教わっておきたい」などといわれてとても充実した経験が出来た実習生もいる。カバディは「あまり知られていないスポーツなのでみんなが珍しがって一緒にやってくれた」。あるいは日頃顧問が男子についていて女子にはついていないのでバレーボール部について一緒に練習したら大会で準優勝して地元新聞に載って喜ばれた。などなどこれらに関するエピソードはたくさんある。いずれにしても自分が好きでやっていたスポーツが中学生に教えて喜ばれる、部活での自分のアドバイスが中学生の練習の力になるという経験は実習生を自分が好きだからやるという枠からスポーツそのものの意味をもう少し広い視野で捕らえる機会にもなっている。

最後に短大の教職課程は2年間という短い期間のなかで行われることの意味についてふれておき

たい。これまでアンケートや実習生の記録簿に記された感想にあるように「短大で教員免許をとる」事を一つの大きな目標として入学してくる学生が多くいる。高学歴化が進む中で2年間で自信を持って教員として学校現場にすぐにたつことは難しくても、教員免許を取得する過程のなかで身につけてきた技量や生徒達と接する中で広がってきた視野は様々な職業の中で生きる力となっている。「授業が面白い」とかんじて幼児体育の先生になった人、教育実習や社会体育での学童保育の経験を生かして保育園の保母になった人、障害者の施設保母として働いている人、またスイミングで水泳を子どもたちに教えるときそれぞれ教育実習の経験が生きていると感想を寄せている。こうした卒業生の進路状況を見ると短大での教育実習は大きな社会的意味を持っているという事ができるだろう。

また実際に教員を目指す学生にとっても大きな意味がある。それは2年間の中で実際に教育現場で経験し自分の適性やこれからの進むべき方向を実際的に考える機会にめぐまれるからである。推薦入学で短大に入学したある学生は次のように語る。

「自分が大学に入ったときの一番の目標は教員免許を取得することであった。高校の時必死で部活だけを頑張ったが、大学ではたくさんの事を頑張りと、学びとり、自分を高めたいと思い、その中でも一番の目標が教員免許であり、教育実習であった。その思いと19年間生きてきた自分を全てぶつけるつもりで実習に臨んだ。……先生が本当に心から伝えたいと思うことは生徒もものすごく素直に感じてくれるとわかった。2週間先生という職業についてたくさん学んだ。まだ、仕事の大変さの100分の1も分かっていないのかもしれない。でも先生という仕事のすばらしさはたくさん感じさせてもらうことが出来た。……これからも楽しく一生懸命に先生という職業に就くことを目標に自分を高め頑張っていきたい」('97, T.A. 君)

また4年制大学へ編入したある学生は「4年後に教育実習だったら、自分の勉強の目的を見失ってイヤになっていたかもしれない。短大で行くこ

とが出来てよかった。これからは高校の免許もとりたいた」とはなしていた。また2年間だからこそ大学にこれたという学生の存在を見落とすことは出来ない。その学生たちにとっては2年間の中で「まず小さいときからの夢の一つである教員へ近づく」事が重要なのである。その意味では不十分なところをたくさん持っていながらも2年間で教育実習に行き実際に教育現場について学ぶこと、その中でさらに勉学を続けたいという気持ちが強くなったときはまた自分で働いて次のステップに進むなど様々な方向が模索されるだろう。以上のように見ると短大における教職課程は学生たちの進路選択にとって重要な意味を持っているという事が出来る。2年間だけですべてをこなすのではなく次のステップへの見通しを持ったプログラムを組むことが重要である。

まだまだ改善の余地がたくさんあるだろう。実習生たちの声を聞き、また受け入れてくださった実習校の先生方のご意見をうかがいながらさらに充実させて行きたいと思う。

*付記 本稿は日本教師教育学会第7回大会(1997年10月26日)で藏原と加納の共同研究として口頭報告したものを大幅に加筆したものである。1～2は加納弘二、3～5は藏原三雪が分担した。

参考文献

- 田中喜美ほか 「付属学校と大学との協同による技術科教育実習の事前・事後指導」(日本教師教育学会年報第6号 pp.96-113, 1997年)
- 町田健一 「望ましい教育実習体験とは：広がり・深まりの形成」(同上書, pp.114-133)
- 松井真知子 『短大はどこへ行く ジェンダーと教育』勁草書房